「キャッチフレーズ＆フォトコンテスト」審査講評

ゲスト審査員・若江漢字（美術家）

短期間の周知にもかかわらず応募総数の多さに驚かされ、また普段使いもしない脳の部位を大いに刺激され続けた選考の日々であった。

キャッチフレーズは、全 636 点の中から二回の選考を経て最終的に 25 点に絞り込まれ、最後に「海に恋した美術館」の箕輪匡則さんが満評で一席と決まった。一文字違いの「海が恋した美術館」の応募作 1 点があったけれども「が」と「に」の違いが明暗を分けた。鎌倉にある八幡さまの森に囲まれた近代美術館が葉山の海岸へやって来たのであり、海は元からそこにあり、美術館がそのピクチャレスクとしか言いようのない美しい海に憧れ恋してやって来たのだから、これはやはり海にの「に」でなければならない。

芥川龍之介が天才を語った有名な警句の中で僅かな一歩の違いを“百里の半ばを九十九里とする超数学”を知らねばならぬと言っているように「が」と「に」の一文字には大きな隔たりが存在するのである。

昭和の文豪達が宮本武蔵の名言「我事において後悔せず」か「我事を後悔せず」と読むか論争し、文壇を賑わせた事件があったが、言葉を扱う芸術にとって一文字とはいえ峻厳な解釈を必要とする大問題なのだ、たった一文字とはいえ選外となった方には申し訳ない次第である。

次席を含め他の 5 点の作品、遠藤知佳、渡久山七重、川村均、真崎莉緒、塚本清志ら諸氏の作品もそれぞれ素晴らしいフレーズの創出であり、企画展の内容によってはどれもが最もふさわしいキャッチフレーズになるかわからない程の秀作揃いであった。

フォトコンテストの公募期間は時間的な制約があり、四季折々の写真とはいかなかったが、それなりの公募写真が集まり、やはり三次選考までかけて丹羽由美子さんの写真が 2 作とも満票、それに次ぐ票を得てまったく異論なく一席と決定した。その他にも限られた期間内の季節であれ演出したものなど心の残る写真作品が多数あったけれども渋野秀司さん、小林隼也さん、小菅千秋さんの 3 作品が次席となった。

次回このようなコンテストを実施する場合には、一年間を通じて、四季折々の風景が撮影できるように、長期にわたる応募期間を設定することが望ましいと感じた次第である。

二日間の審査ではあったけれども、神奈川県立近代美術館 葉山がこれほど多くの方々に関心を持たれていることを知り、心地よい選考体験となったことを参加者、関係者の皆さまに感謝したい。

審査委員長・水沢勉（神奈川県立近代美術館長）

言葉と写真を選ぶ――ふだんもっぱら美術作品とそれに関わる言説を相手にしている美術館の人間にとって興味深く刺激的な体験であった。参加者の熱意は、応募作品総数 636 点（応募者数 297 名）に達したキャッチフレーズのおびただしさからも十二分に伝わってきた。写真の数は、それに比べると、応募作品総数 77 点（応募者数 30 名）とやや少なかったものの、応募期間がそれほど長くなかったことを考慮するならば、充分な数であり、それ以上に、全体として質の高さが印象的であった。

簡潔な言葉によって物事の本質が要約されることは、言語という伝達手段を手にしたとき、わたしたち人間をもっとも魅了した点ではなかったか。みごとな言葉の使い手の肉声に接したとき、少し頭がよくなったように錯覚するのは、言葉に宿るもっとも根源的な力のおかげであろう。

最優秀賞に輝いた箕輪匡則さんの「海に恋した美術館」は、一色海岸に佇む葉山の美術館の立地を鮮やかに呼び覚ます。1983 年のテレビドラマ「夏に恋する女たち」を連想させるが、現在形ではなく、過去形であるところに美術館の歴史までも意識させる効用がある。優秀賞、それぞれに魅力があるが、塚本清志さんの「ひとは、地球で、いきてゆく」 は、思い切った飛躍の感覚がすがすがしく、わたしには忘れがたい作品であった。

写真は、四角形にフレームされるという点では、現在、絵画以上に絵画的な表現であろう。写す対象が自然であるとき、フレームインされるものよりも、フレームアウトされたものを、どれほど観る者に喚起させることができるかで、表現の強さが決まるように思える。最優秀賞の丹羽由美子さんの「葉山の休日」は、冬の空気の透明感をみごとに捉え、松の木をよぎるトンビも含めて、瞬間でありながら永遠を宿してもいる世界の広がりを暗示することに成功している。小菅千秋さんの作品にもそうした気配が色濃い。ただ、フレームインされている彫刻家西雅秋の作品《大地の雌型より》が、一見、作品のようにみえにくいために、美術館の存在がすぐに感じられない点が悔やまれる。しかし、とても冴えたみごとな仕上がりである。

選に漏れた作品にもいくつも個性的なものがあった。

皆さまの意欲とご協力に心より感謝したい。